

「日本語を教えるための日本語文法」
第7回-2「追い込む」指導法の考え方
「今晚勉強するつもりです」

山田 あき子

<http://yu-yu-jin.com/>

<https://www.facebook.com/yuuyujin.com/>

nihongo@yu-yu-jin.com

検討したいこと <~つもりです/~ないつもりです>と<~ます/~ません>との選択基準 →第7回-1

提案したいこと 追い込む視点での <~つもりです/~ないつもりです>の指導→第7回-2/第7回-3

第7回-2/3では<つもり>の指導を題材に追い込む指導の考え方を示していきます。

第7回は3篇に分けてアップしています。第7回-1で、検討したいことを取り上げており、第7回-2、第7回-3で提案したいことを取り上げます。第7回-2は《「追い込む」ことを前提とした教案作成についての考え方》と第7回-3《「追い込む」教案例》と分けてアップします。結局第7回は第7回-1、第7回-2一、第7回-3として掲載します。

- 第7回-1
- 1 「つもり」の用法について
 - 2 <~つもりです>の [これからすること] を伝える用法
 - 3 これまでの検証のまとめ
- 第7回-2
- 4 指導 A
 - 4-A 「追い込む」ことを前提とした指導についての考え方
 - 4-A-1 インタラクション
 - 4-A-1-1 インタラクションは「伝えたいこと」のやり取り
 - (1) インタラクションの原型
 - (2) 授業内でのインタラクションの特徴
 - 4-A-2 おしゃべりは脈略のある話題の連続
 - 4-A-3 教案にいて
 - (1) 教案作成
 - (2) 教案の流れ
 - (3) 指導項目の導入
 - (4) 導入項目の使用・運用練習
 - 5 まとめ
 - (1) 追い込みがうまくいくには
 - (2) 指導者もクラスおしゃべりの参加者になる
 - (3) 教案例はサンプル

最後に

- 第7回-3
- 4 指導 B
 - 4-B 「追い込む」教案例

第7回で取り上げる指導項目が<~つもりです>ですから、初級の項目の指導についてです。さらに媒

介語を使用しないことを前提にしています。本稿では、指導項目と「伝えられること」、「伝えたいこと」との関連をインタラクションをさせながら分からせ、運用できるようにさせようという提案です。

4 指導

4-A 「追い込む」ことを前提とした指導についての考え方

以下の点を踏まえて、「追い込む」ことについての考え方を述べていきます。

<～つもりです>の指導で追い込んで想起させたい「伝えたいこと」は「表明するこれから行う動作行為は必ず行うとは言えないこと」です。(参照 第7回-1)

非母語指導の目標は、目標言語でおしゃべりができるようにさせることです。

第7回-1でやり取りという言葉を使いましたが、クラス全体でやり取りを連続させることで、あたかもおしゃべりを続けているように授業を進めたいと考えています。おしゃべりに参加することにより話し手にも聴き手にもなりますから、学習上実践的です。さらに「伝えたいこと」、「伝えられていること」と表現方法との関係を最適な文脈で適切に認知させることができますから、習得につながると考えています。

クラスおしゃべりを進めていく中で、既習の表現方法を活用して、表明できる「伝えたいこと」は言葉で表明させ、自信がない場合は自信が持てるように誘導し、躊躇したら躊躇を取り除いてやり、さらに「伝えたいこと」があるけれど言葉での表現方法を知らないことに気づかせ、表現方法を知りたいという気持ちにさせ、新規の指導項目の導入をしたいと考えています。言い換えれば、クラスおしゃべりの展開の過程で導入の「追い込み」を行い、おしゃべりを遂行する中で「伝えたいこと」と表現方法をしっかり結びつけさせ、目標言語を身に付けさせようという考えです。

非母語指導で目指したいことは、学習者がおしゃべりができるようになることだと言うと、「伝えたいこと」と言うより「言いたいこと」と言ったほうが分かりやすいと思われるかもしれません。しかし、「言いたいこと」には文句・注意・意見などという意味もありますから、それにとらわれないように「伝えたいこと」を使っています。

「伝えたいこと」は誰でも持ちます。例えば、「これから行なうこと」について「必ず行うとは言えない」ということを伝えたいという思いは、誰でも共通に持ちます。それを表明する表現方法が言語を異にする学習者の間でそれぞれ違い、目標言語である日本語とも違うということだけです。非母語指導の視点で言うなら、目標言語の発達段階にある学習者は、「伝えたいこと」を目標言語で表明できないというだけなのです。

この点においても「伝えたいこと」にこだわりたいと考えています。「伝えたいこと」は皆同様に持ち得るからです。このことが学習者と指導者の間はもちろん、学習者間にある共通基盤です。

4-A-1 インタラクション

おしゃべりはやり取りの集合体です。一往復のやり取りをインタラクションと本稿では呼びたいと思います。共通理解のためにインタラクションについて整理しておきます。

4-A-1-1 インタラクションは「伝えたいこと」のやり取り

インタラクションは「伝えたいこと」あるいは「知りたいこと」があって始まります。

「伝えたいこと」が頭の中にあるだけでは、インタラクションは始まりません。それを言葉にして初めてインタラクションが始まります。インタラクションは表面的には言葉のやり取りに見えますが、「伝えたい

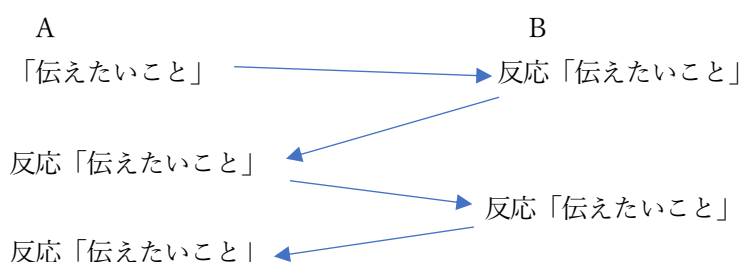
こと」のやり取りです。表出される言葉は、「伝えたいこと」を担っているにすぎません。

(1) インタラクションの原型

インタラクションの原型を最少参加者数2名 (AB) で確認しておきます。図1に見るようにAの働きかけにBが反応し「伝えたいこと」が誘発され、そのBからの反応が働きかけになり、それによりAに「伝えたいこと」が誘発されます。それがBに対する反応として働きかけるといようにAB間で働きかけと反応がいったりきたりしてインタラクションが連続し、おしゃべりとなります。双方が共通言語を有し、十分に言語を使いこなせる場合のインタラクションは、働きかけの「伝えたいこと」も働きかけによって誘発された「伝えたいこと」も確実な表現方法を使って表明されます。言うまでもなく働きかけ一反応は淀みなく躊躇なく展開していきます。

図1 インタラクションの原型

(注：→ は働きかけの方向を示す)



(2) 授業内でのインタラクションの特徴

授業でとり行うインタラクションは、既習の表現方法を使わせる目的と未習の表現方法を欲するように仕向ける目的と二つの目的を持って行われます。

インタラクションは原型のようにスムーズには進まないことがあります。日本語での表現能力が未発達であることから起因する各種の不具合が、学習者が反応を表明する際の表現方法に生じるからです。

学習者の反応にみられる類型的特徴

授業内のインタラクションにおいて学習者の反応に見られる特徴を整理しておきます。

図2 授業内のインタラクション

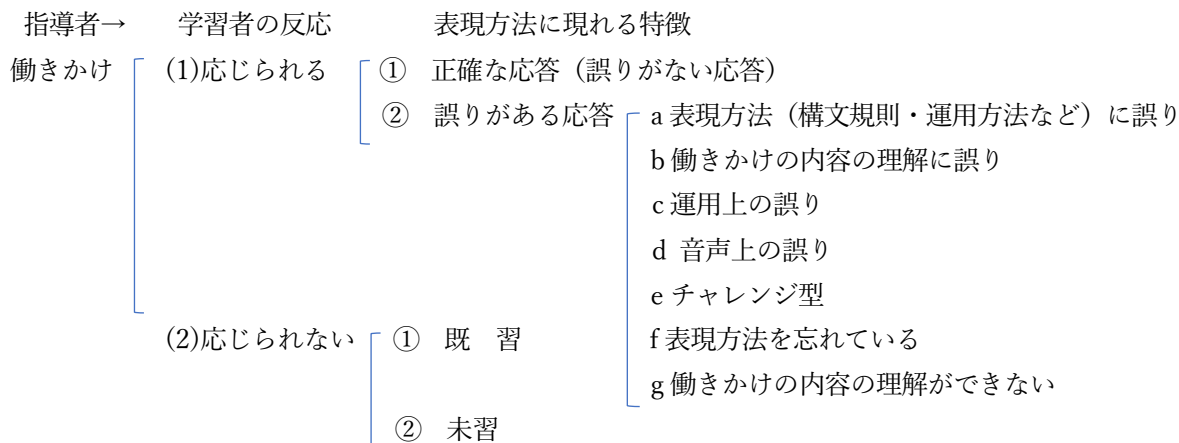


図2に見るように、指導者からの働きかけに対し、学習者の反応は(1)応じられる場合と(2)応じられない

場合に大別されます。(1)応じられる場合、(2)応じられない場合それぞれの応答としての表現方法の特徴を典型的に整理すると7分類に整理できます。

- (1) 応じられる場合には①正確である場合と②誤りがある場合があります。
 - ① 正確である場合は表現方法にも内容理解にも言語運用上にも音声面にも誤りがない応答です。
 - ② 誤りがある場合は、a 表現方法に誤りがある場合、b 働きかけの内容理解に誤りがある場合、c 運用上に誤りがある場合、d 音声上に誤りがある場合に分類できます。さらに正確かどうかわからないけれど言ってみるといったタイプの e チャレンジ型もあります。
- (2) 応じられない場合は、①既習の場合と②未習の場合とに大別されます。
 - ① 既習の場合には、f 表現方法を忘れている場合、g 働きかけの内容が理解できない場合に分類できます。
 - ② 未習の場合は当然ですから、これについては後段で考えます。

授業でのインタラクションでは、学習者からの応答に現れる表現方法に図2で整理したb~gの不具合が単独にあるいは複合して現れる可能性があります。ですから、インタラクションを基盤にした教案を作成する際には、不具合b~gが常に起こりうることを想定・予測していなければなりません。それぞれの誤りについて修正のタイミングも含め、どのように対応するかを予め考えておかなければなりません。インタラクションの原型のようにインタラクションが展開できるようにさせることが非母語指導の目標だからです。教案例にもいくつか想定・予測を盛り込んで作ってあります。

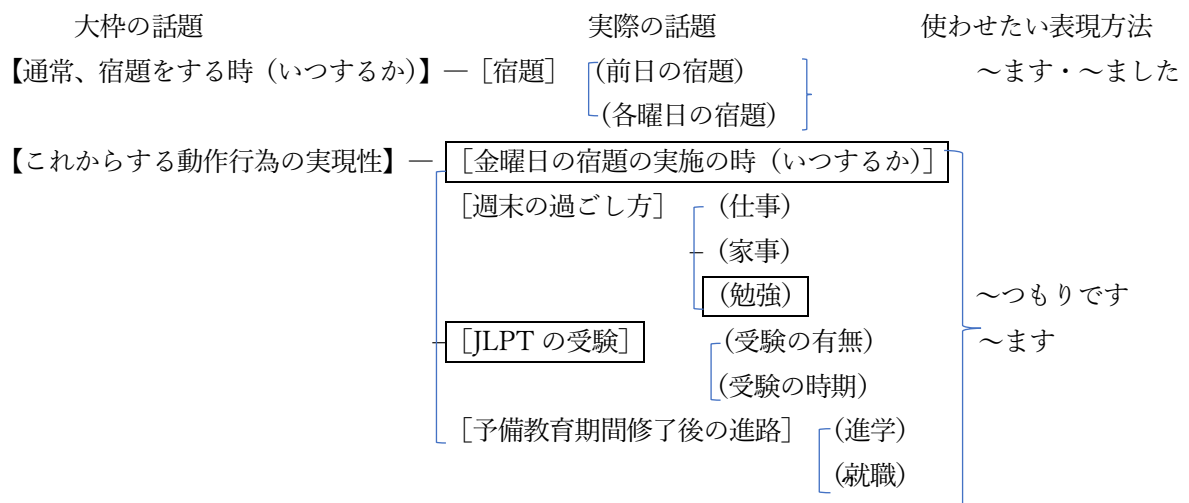
4-A-2 おしゃべりは脈略のある話題の連続

インタラクションの原点は知りたい・伝えたいという素直な気持ちです。

インタラクションは何かについて伝えたい・話したい・知りたいということがあって始まります。何かについての何かが話題です。その話題が脈略を持って連続しておしゃべりは展開します。

今回提案する<つもりです>の教案例を例に引くなら、導入の話題を「金曜日に出る宿題をいつするか」とし、話題の展開を以下のように計画をしました。脈略を持たせるため、次の話題へのつなぎとした話題を□で示しました。

図3 教案例の話題の展開



クラスおしゃべりの話題の展開も、私たちがテーマを持って発表するような場合、発表原稿を作る前にアウトラインを考えますが、それと同じです。

当該の指導項目の〈～つもりです〉の追い込みの話題を「**金曜日の宿題の実施の時(いつするか)**」とし、大枠の話題は【通常、宿題をする時(いつするか)】で始め【これからする動作行為の実現性】に展開します。【これからする動作行為の実現性】について話す話題を「**金曜日の宿題の実施の時(いつするか)**」→「週末の過ごし方」→「**JLPTの受験**」→「予備教育期間修了後の進路」を話題として授業を展開します。【通常の宿題】については、(前日の宿題)(各曜日の宿題)のことを話題にし、「週末の過ごし方」については、(仕事)、(家事)、(勉強)のことを話題にし、「**JLPTの受験**」ではその(受験の有無)と(受験の時期)、「予備教育期間修了後の進路」については(進学)、(就職)を話題にしています。その各々の()で示した話題について〈～つもりです〉〈～します・しません〉を使わせる教案になっています。

インタラクションは知りたいこと、伝えたいことがあって始まり、おしゃべりの参加者は知りたいことを知り、伝えたいことを伝えておしゃべりは進行します。今回の教案例では、図3で提示したような話題でインタラクションをしながら、クラスメートの「宿題」・「勉強」に取り組む姿勢、「将来について考えていること」をお互いに知るようになります。

4-A-3 教案について

インタラクションが「伝えたいこと」のやり取りであること、クラスおしゃべりが話題の連続であることを踏まえて教案を作成します。教案はインタラクションをどう進めるか、クラスおしゃべりをどのような話題で展開するのかのシナリオです。

(1) 教案作成

学習者を思いのままに想起した「伝えたいこと」で授業に参加させてしまうと、教えるべき項目を必要とするような「伝えたいこと」を想起するかどうか予測できませんから、授業計画が作れません。さらに、複数の学習者が一堂にいるとそれぞれ異なる「伝えたいこと」を持つ可能性があります。一人一人の「伝えたいこと」に対応することはできませんから、指導者側のコントロールが必要となります。

新規の指導項目が必要となる「伝えたいこと」を持つように追い込み、「伝えたいこと」を表明させる練習をするという意図を持って授業計画を立てます。

教案作成はクラスおしゃべりの展開を想定し、個々のインタラクションを想定しながら働きかけと反応のシナリオを書く作業です。それは授業の流れのプロットだけではなく、指導者と学習者の全ての台詞、ト書きも含めて書いたものを作ります。4-A-2で提示した話題の構成に照らし合わせてみると〔 〕で示した話題がプロットに当たると言っていいいでしょう。ここで留まらず、()で示した実際に表現させるための話題まで準備しておきます。

こう問いかけたら、こう反応するだろう。こう反応したらこう進めよう。予測した反応をしなかったら、こうしよう。あの学習者にはあれを期待してこう問いかけようなどと言ったことを考えながらシナリオを作ります。ああなったら、こうなったらと想像し、シミュレーションをしながらシナリオを作るのは、学習者からの想定外の反応に慌てないためです。指導者自身が作るシナリオは指導者にとっては理想とするものですが、絶対のものではありません。指導者自身が作ったシナリオで押し通すことはできません。学習者が持った「伝えたいこと」を拾いながら授業を進めていきたいからです。そうはいつでも脱線はしないようにシミュレーションをして本流への戻り方も予め考えておくことが肝心です。言ってみればリスクマネジメントです。

肝心なことは、学習者が主体的に参加しているように感じられ、かつおしゃべりを楽しめるような教案を作成することです。

それには話題選びと、クラスおしゃべりが自然な脈略を以って展開することが肝要です。

(2) 教案の流れ

大きな流れとしては、【①挨拶—②既習の表現方法を運用させる—③導入—④新規の導入項目の使用・運用練習—⑤挨拶】と展開します。

①挨拶／② 既習の表現方法を運用させる

挨拶の際に、近況を聞いたりすればそれは②の活動になりますから、①②は順番に行うということは必ずしもありません。①②の入れ子状態があり、徐々に②を中心とした授業内容にすることが私の場合は多いです。②の段階はもちろん復習の意味もありますが、次の③導入への助走としての意味もあります。すなわち学習者側にレディネスを整える目論見もあります。

追い込みには、学習者にインタラクションが続けられないという思いを持たせることが重要ですから、学習者を導入の受け入れ態勢に導くため、導入に至るまでの助走もまた重要です。教案例ではこの助走の部分が長いですが、スムーズにインタラクションが続けられていたのに、続けられないというショックを大きくする狙いもあります。

(3) 指導項目の導入

導入の段階では、クラスおしゃべりを遂行しながら、新規の指導項目となっている表現方法を知りたいと思うように誘導するための「導入の話題」を決め「追い込みのインタラクション」を考えることとなります。

図2の(2)応じられない—②未習に当たります。「追い込みのインタラクション」は表現方法を「知らない」ことに気づかせるインタラクションです。未習に気づかせ、必要に迫り新たな表現方法を指導するきっかけを作るためです。重要なことは、インタラクションを続けたいが、続けられない、すなわち、どう表現したらいいのかわからないという場面に学習者を遭遇させることです。

導入の追い込みでの働きかけに対して、学習者の反応は二つのタイプが想定できます。授業内の学習者の発話に見られる特徴(4-A-1-(2))で整理したように、反応に応じられない場合((2)-②)と、言ってみるといった反応はするものの誤りがある場合((1)-2-e)です。いずれかの反応を予測して追い込むこととなります。

教案例にはチャレンジ型の反応を予測し一部盛り込んであります。

(4) 導入項目の使用・運用練習

導入が終わった後、クラスおしゃべりを展開する中で新規導入項目を使うように仕向けるインタラクションを想定します。その過程で新規の表現方法を学習者が「分かった」ことが確認できるようなインタラクションも用意しておきます。パターンの練習は必要があると指導者が判断した場合に、行えばいいと考えています。

教案例のようにクラスおしゃべりを展開していくと、既習の日本語文法・語彙を使わせる機会が拾えます。導入した時より、より自然な環境で何度でも使う機会を提供することができます。構えて復習としなくても十分に復習ができます。

流れは、教案を立てるときの目安であって、この順で進めていかなければならないということはありません。例えば、①／②の段階であっても、導入のチャンスがあったら導入をすることもあります。導入のインタラクションで想起させたいと考えていた「伝えたいこと」を学習者が持ったというようなときです。あえて追い込みをしなくても自然な環境で誘発されたのですから、このチャンスはいかしたいものです。

臨機応変に対応することが必要です。

5 まとめ

(1) 追い込みがうまくいくには

「追い込み」がうまくいくには、学習者にクラスおしゃべりに参加してもらわなければなりません。クラスおしゃべりに学習者に参加してもらうには、何が話題になっているか、何について皆が話しているかをわかってもらい、話についてきてもらうことです。それに、他者の発話内容お互いに関心を持ってもらうことです。

仮に、【金曜日の宿題の実施の話題】で、全員が「明日宿題をするつもりです」となったとしても構いません。話題になっていることについてクラスメートはどのような態度なのか、どのような計画を持っているのか、それに対して自分はどうなのだったかといった思いで、クラスおしゃべりに参加してさえいれば退屈だということはありません。全員が同じだということに対して、学習者も指導者も何か伝えたいことを持つでしょうから、それを大切にしたいと思います。「皆、同じですね。〇〇さんも同じですか」などとその思いを指導者側から伝え、クラス全体で驚きを共有することもできます。皆同じだからつまらないということはありません。繰り返しになりますが、「えっ、同じ?」「また、同じ」「そうか、皆同じ行動パターンなんだ」「また?」「へーまたか」と声に出したり、心のうちで言ったりしながら学習者がクラスおしゃべりに参加してくれ、最後にみんなで大笑いとなったら大成功です。

しかし、余談ですが、【金曜日の宿題の実施の話題】を導入の話題として予定していたら、導入については指導者の目論見は外れていますから、次の手を考えながらクラスおしゃべりを続けることになります。

(2) 指導者もクラスおしゃべりの参加者になる

肝要なことは指導者自身も素直にかつ自然にクラスおしゃべりの参加者であることです。インタラクションは相手からの反応内容を予測し、かつ期待して行われます。自分だったらこう表現するだろうと思いつつながら反応を待っているものです。ですから、普通に、自然にインタラクションを進め、おしゃべりに参加していると、学習者の運用能力について「わかっている」「わかっている」ということもわかりますし、「不自然」、「違う」という点にも気がつきます。さらに、新たに想定していなかったことを知りたいという思いが募ってくることもあります。それは指導者だけではなく、学習者も同じである場合が多いでしょう。

「不自然」、「違う」という点について言えば、<は><も>がいい例だと思います。<は><も>を指導するときには本当にしつこく練習をすると思うのですが、授業活動を形式の練習や型にはまったロールプレイで行うと、<は><も>の必要性に気づけないことがあります。既習の表現方法は使うべき時に使わせないと、運用上に規則の揺れが生じてしまいます。同じような展開で以前は使ったのに、今回は使わないままにしていると、定着を阻害することになりかねません。

指導者もクラスおしゃべりの参加者であり、おしゃべりを楽しむことが肝要です。

(3) 教案例はサンプル

教案例は、一つのサンプルに過ぎません。教案を立てるときに何かヒントになればと思います。相手が違えば、指導対象の人数も違うでしょう。話題も関心も違います。授業を実施する時期も季節も違いますし、授業が行われる場所も違うでしょう。<～つもりです>の授業をするときに、何か使えそうな絶好の出来事があるかもしれません。

最後に

実はクラスおしゃべりは追い込みの連続です。

計画されたクラスおしゃべりを展開する過程で、表現方法を使うように仕向けること自体、実は追い込んでいくことです。クラスおしゃべりではインタラクション遂行の過程で想起した「伝えたいこと」を表明するように全て仕向けられます。インタラクションの指導者側の目論見の一つは尋ねたり、促したりしながら学習者が思いついた「伝えたいこと」を既習の表現方法で表明させたいというものですから、クラスおしゃべり自体が追い込みの連続だと言っていいでしょう。

「伝えたいこと」を言葉にする習慣付けこそが「追い込み」で導入することの大前提です。授業を「伝えたいこと」のやり取りであるインタラクションで進め、クラスおしゃべりを展開しながら進めていくことの重要性がここに 있습니다。

指導の根本は、教えてあげるのではなく、一緒に課題解決をしていくことなのではないかと考えています。指導者の重要な役割は、学習者が問題解決をやすく手助けをすることだと思います。

今回は、初級の段階の教案ですが、中上級でも考え方の基本は変わりがないと考えています。

「伝えたいこと」、「伝えられること」の視点で指導項目を分析する点は変わりませんし、インタラクションを通して課題解決をしながら授業を進める指導の根本にもなんら変わることはないからです。

また媒介語が使える場合には、<～つもりです>が「これから行う動作行為は必ず行うとは言えないこと」という伝えたいことを伝える時に用いられることを媒介語で伝えることができます。導入項目の使用・運用練習以降は媒介語を使おうと使うまいと変わらない展開で授業が進められると考えています。

《B 「追い込む」教案例》は7-3に別掲となっています。

ご参照ください。

メモ

「考え方」の部分についても、教案例についても、十分に書ききれていない箇所がありますし、分かりにくい箇所もあると思います。

ご不明な点もあると思います。

違うぞと思われた点もあると思います。

追い込みの話題もたくさんありますが、今回は追い込みの話題の抽出方法は割愛しました。

日本語研究会では「よりわかりやすく指導するには、より運用能力の高い学習者にするには」という命題で意見交換をしていければと考えています。